

# 速報 立山2号

## 大同大学大同高校

春陽漁介 作

大同大学大同高校演劇部 潤色



### 「ト音」

#### ○幕間討論

- Q. テンポの掛け合いをどう練習したのか？  
A. 普段のやりとりも同じような感じ。「楽しんでやってみて」というと自然と起きる。
- Q. 暗転の音楽にはどのような意図が？  
A. 緊迫感を出す時は非常ベル、けたたましい感じを出すときは犬の吠え声。
- Q. 舞台セットの形やシンプルさはどうしてか？  
A. 奥行きやシンメトリーを出し、シンプルなのは作品の雰囲気に合わせてから。
- Q. 長谷川は藤秋生に気づいていたのか？  
A. 薄々気づいていたが、興味のないものは気にしないため、知っていてもどうでも良かった。
- Q. 役作りはどうしていたのか？  
A. 何で？を追求し、みんなで意見を言い合う。

#### 感想

- ・笑いもあってテンポも良かった。
- ・鳥肌が立つくらい面白かった。
- ・退屈せず、吸い込まれた。
- ・SFチックで因果関係がはっきりしていた。

大同大学大同高校のみなさん、

お疲れ様でした！

#### ○あらすじ

新聞部は藤と秋生の二人だけ。いつも保健室で養護教諭の江角にちょっかいをかけられながら友達の千葉も混ざってネタ会議をしている。ある日二人は先生の嘘を暴いて記事にすることを思いつく。しかし、秋生が担任の坂内との個人面談の最中に秋生が倒れてしまう。実は秋生は共感覚を持ち、嘘がモヤとして見えるのだった。そこで、共鳴に興味を持ち、江角とともに人間の固有振動数“ソルフエジオ”で人間を共鳴させるという実験を行っていた長谷川にぜひ研究に協力してほしいと言われる。ソルフエジオは嘘に含まれていることが明らかに。

そして、藤 秋生は嘘を知る。

#### ○客席インタビュー

- Q.この劇を見てどう思いましたか？
- ・役者が自分自身の役がどのような人物であるかがわかっている。
  - ・照明などの演出によって台詞だけではわからないことを感じられるようになっていた。
  - ・テンポ感がよく、コメディシーンとシリアスシーンでの切り替わりが心地よかった。
  - ・藤君と秋生君との関係性が周りの反応から匂わされていた。